

日時:平成 29 年 10 月 21 日(土) 11:00~12:00

場所:史跡江馬氏館跡公園 会内

## 「 豪族江馬氏が残した庭 -庭園文化の伝播- 」

まるやま ひろむ  
講師:丸山 宏 氏(名城大学教授)

### 1. はじめに

丸山でございます。(自分の前の委員であった)加藤<sup>まさひこ</sup>允彦さんは文化庁におられたのですが、私の先輩なんですね。それでこちらの整備委員にどうかということで呼ばれました。加藤さんはこの江馬に非常に熱心でした。かつては森<sup>もりおさむ</sup>蘊先生という日本庭園史の大家がおられまして、(森先生によって)昭和 40 年代から調査が始まったと聞いております。そのころ私はまだ学部生で、江馬のことは何も知らない時期でした。

縁あって森先生から始まるこの庭園に関わらせていただいております。「五ヶ石」と言われている石の頭が5つあって、庭園であるということはわかっていたのですが、その発掘・整備が始まったというのがいきさつです。

私も文化財の委員は、今は色々な所でさせていただいていますが、この江馬の委員会というのが私の最初の経験として重要であったと思っています。史跡であり、この 10 月に名勝になったということで、非常にすばらしいことだと思っています。そういうこともあって、今回お引き受けさせていただきました。こういう風景を見ていただきながら食事もできるし、こういう催しを度々されているということをお聞きして、私自身も非常に喜んでおります。

### 2. 日本庭園史概説

最初に何が申し上げたいかと言いますと、庭園造りというものは、「都に対する一つのあこがれ」であったということです。

極々簡単に日本の庭園史の話をさせていただきます。もともと庭というのは、大陸・朝鮮半島から帰化人が来て、日本に技術を伝えたということがあります。その背景には道教であると



か仏教であるとか、そういう思想が入ってきます。特に仏教というのは、今で言えば最先端の情報と技術があったわけですね。それが伝わって、日本の中で消化されていくわけです。

道教は神仙思想、蓬莱山に仙人が住んでいるという話があります。それ自体は形而上学的な話ですが、具体的にその島(蓬莱山)を作っていこうというのが庭園の始まりです。

仏教においても曼陀羅というのがあります。その中に釈迦如来がいて、周りに菩薩がいる。そういう世界を作っていこうというのが庭造りなわけですね。この仏教については、蘇我氏と物部氏の対決があって、仏教派の蘇我氏が勝って日本の国教になっていく。その中で仏教という思想を具現化する、あこがれの世界を作るということで庭というものが出来ていったということを考えていただければ良いと思います。特に浄土思想、ヨーロッパでいうパラダイスですけれども、そういう浄土を庭の中に造っていこうということが、日本の庭園文化の大きな枠組みだと思っています。

奈良の平城宮の東側に東院庭園<sup>とういんていえん</sup>というのがあり、発掘され整備されています。もう少し南の方には宮跡庭園<sup>きゅうせきていえん</sup>というものもあり、こちらも発掘され整備されています。その技術を見ますと、明らかに大陸の技術、つまり水利技術、水をコントロール出来る技術というものがその中には入っていたと思います。

ただ違うのは石組みという手法なんですね。石組みは日本独自のもので、大陸には花崗岩が多いのでそれを加工してつくられたもの、それと自然石を漆喰によってひっつけていく、今でもそうですが中国庭園というのは奇岩怪石をひっつけて造形していくものというのが基本にあります。日本庭園はそうじゃないんですね。自然の石を組合せながら石を組む。今実際に(江馬館の庭園の石を)見ていただきますと、これは船津花崗岩<sup>ふなつかこうがん</sup>という、この地方で産出する石を組んでいます。そういった(石組みの)技術が、飛鳥・奈良以降には確立していきました。

それが平安期になると、もっと新たなものとして寝殿造り庭園というのができます。寝殿造り庭園というのは日本独自で南に大きな池、その中に中島をつくります。中島というのは浄土の象徴ですね。そして手前に寝殿をつくり、そこで殿様たちが庭を見ながら楽しんだということになります。藤原氏が貴族として力を持ち、安定した時代をつくったんですね。庭園というのは、本来は安定した時代に造られるものなんですね。ところがここの江馬というところは、いわゆる戦国時代であったんですね。

「作庭記<sup>さくていき</sup>」というのは、日本最古の庭園書です。橘俊綱<sup>たちばなのとしつな</sup>という平等院を作った頼通の息子が、寝殿造りの庭の神髓を書き残したもので、それまでの技術や考え方みたいなものが書かれています。その中には先ほど言いました、石のありよう・庭の造り方など、非常に抽象的な言い方もあるんですけれども、今に続く庭造りの手法が書いてあります。

こういう平安時代の安定した時代ではあったんですけれども、地方であこがれだった都の庭園

を造りたいという貴族が出てきます。典型的なのが奥州藤原氏の清衡・基衡・秀衡の三代。彼らはもともと藤原姓はなく、奥州の砂金を都に送り、藤原氏から姓をもらったという経緯があります。彼らは都に対する憧れが非常に強く、毛越寺もうつうじを造り、そこに寝殿造り庭園を造りました。

なぜ都への憧れがあったのか、なかなか難しい問題なんですけれども、文化というのは中央（この時代は京）にある、そういう所の磁場があったと。地方においてはそういうものを写して様々なものが独自に展開することもあったと思います。

その奥州藤原氏をおとしたのが源頼朝です。武士というのは初め都の文化に対して粗野な部分があったわけなんですけれども、都に住んでいるとだんだんと憧れが出てきます。（場所は）鎌倉になりますが頼朝は永福寺ようふくじを造る、そこは近年発掘が進み寝殿造り的な南に池があり、翼廊が出ていたということが分かっています。頼朝も非常に（都に対する）憧れがあって、鎌倉に同じような庭と造ったということでもあります。

鎌倉から南北朝、室町に行くわけでありましてけれども、足利義満が「花の御所」を作って、こちらの江馬はそれに倣って造ったものという話があります。義満が「金閣」、義政が「銀閣」を造り、武士でありながら貴族化していくわけなんですね。貴族への憧れが庭の憧れでもあるし、建物もそうですけれども、「金閣」は煌びやかで派手で、庭はそのままですけれども建物は権力者として目立ちたい・誇示したい気持ちがありました。

この時期に禅宗の「枯山水」がブームになります。中国の思想が日本で持てはやされる、明治維新までは中国というのは日本の憧れの国でもあったんですね。そういうこともあって「枯山水」というのがこの時期出てきます。もう一つ重要なのは枯山水というのは、水を使わないのでメンテナンスが楽なんですね。ちょっと余談になりますが、京都・龍安寺の白川砂というのは白いんですね。もともと方丈というのが薄暗いので月明かりの時はそれを反射して明かりをとったという話もあって、非常に合理的な考え方もあったわけですね。もちろん枯山水は石と砂だけあれば水の心配が要らないというのもあります。そういうのがこの時期に流行りました。禅宗というのは、浄土教とは違って、自力で解決していくのが神髄であると。本来禅宗寺院には仏像は無いんですね。基本的には自分自身が自力でやるということがあるので、仏さんに対して他力本願というのは本来無かったんですね。これは武士の思想にぴったりであったわけです。

室町の足利氏の特徴というのが、土地を持っていなかったんですね。本来土地・荘園からそこで作物をとって、税金を得るのですが、それが無くて苦労したのが足利氏だったわけです。一例を言いますと、天龍寺船てんりゅうじふねというのを考えて、天龍寺を造るために中国に船を送って資金を得たんですね。荘園が無いからそういう工夫もしてたんですね。

### 3. 中世城館・居館の庭—守護大名豪族達の築庭・都への憧憬—

そういう中で応仁の乱が始まり、それが庭園にとって大きなきっかけとなったと思っています。応仁の乱後に都にいた守護大名たちが都を去って行って在地に戻る中で、各地で庭造りが盛んになるんですね。本来なら、先ほど平安時代のところで申しましたとおり、平和な時に庭が出来るわけですが、非常に混乱した時代に庭造りが盛んになったのは、おもしろい現象かなと思っています。

資料にあるように(岐阜県では)江馬氏・東氏とうしがあり、今、岐阜城の信長館の発掘もやっています、そこにも庭が出てきておりまして、来年度以降に整備をする予定です。信長ですから他の守護大名とは違うんですけども、やはり庭を造るということが、彼らにとって一つのステータスといえますか、都の憧れとともに、それを造る事自体が自分の力を誇示できる。特に見ていきますと、都であった主殿しゅでん・常御殿つねのごてん・会所かいしよなど、建物の配置も習ってやっている。都であったものがアレンジはしてあるが、地方でも残ってきている。私自身は応仁の乱の後、在地に戻るときに職人も連れて帰ったのではないかと思います。そうでないと石組みいうものは庭造りをやったことのない人にはなかなか出来ないと思います。そういう人材も連れて帰って造ったのではないかと思います。石組みの技術というのは日本庭園の一番重要な要素です。

もう一つ重要な要素として剪定というのがあります。庭木の剪定ですね。ヨーロッパではトピアリー(topiary)という色んな形、円錐形であるとか、動物の像を作るといことはありますけれども、日本みたいな剪定する技術はありません。剪定というのは日本庭園を維持するのに非常に重要なものなんですけれども、江馬で木を植えていないというのは、後で詳しく説明しますが(理由があります)。剪定技術は日本独自のものです、京都の有名な寺の手のかかった庭でも、見た目には自然風に見せるのが剪定の技術なんです。その技術も、応仁の乱のとき地方に散っていきました。

枯山水というのもこの時ブームであったので、例えば石川県の松波城跡には枯山水の遺構が出てきておりますし、滋賀県の観音寺城跡にも枯山水が出ております。大阪でも池田城跡には枯山水の遺構が出ております。もうひとつ面白いのは戦国末期・安土桃山時代になりますと、茶庭というのが出てきます。それを大成したのは千利休ですけども、茶庭の露地というのは佐賀県の名護屋城跡にその遺構が出ています。

激動期にこういうものを造る意味を考えると、殿さまは精神的な安定を求めているのではないかと。特にお茶というのは一つの精神性があって、お茶を喫することによって平常心が出てくるのではないかと。庭というものは最初中国への憧れがあって、先ほど言い忘れましたが平安時代は、憧れと同時に饗宴の場として、池に船を浮かべて遊んだりもしました。「竜頭鷁首りゅうとうげきしゅ」という言葉がありまして、船首に龍や水鳥の頭の飾りをつけまして、そこでどんちゃん騒ぎをするということもやっております。信仰もありながら、庭に船を浮かべて遊んだというのがずっと続いております。

江戸期になりますと回遊式庭園といわれますが、安定した時代になり、江戸幕府の政策で仏教から儒教に変わっていきます。資料には「真・行・草」と書いてありますが、非常に安定した時代にお城の庭というものが造られていくなかで、江戸期の日本庭園は一番総合化されたものになっていったと思っています。一つの寝殿造りの大きな池庭を造って、その中には枯山水もあつたり、茶庭を造ってみたり。また、一番よく言われるものとして、<sup>とやまそう</sup>戸山荘という所がありましたけれども、名所をめぐるようなしつらえを庭の中に作っていく、遊びの空間があります。岡山後楽園にもありますし、小石川後楽園にもあります。そこには中国の儒教的なものが存在しています。それは例えば太鼓橋、円月橋のような施設であるとか、堤というものもあります。

文化というものは展開していくなかで型を作っていくというのがあります。日本人は型を作るのが好きですね。茶道もそうだし、華道・剣道・柔道とか色々な「道」があるように、庭にも型を作りまして、型によって色の表現を変えていく。

これは江戸後期に、<sup>あきさとりのう</sup>秋里籬島というジャーナリストが「都名所図会」とか「都林泉名勝図会」とかを書いた人物ですけども、所謂半切り・出版することによって流布していきます。その中に庭についてのカタログ集がつけられます。「真」というのはすべての要素が入っています。「行」は少しそれを略し、「草」はもっとも略していくというものです。こういった庭の型を絵図で、版木で出版する。今の出版と違って版木で500部くらいです。後刷りは明治以降も版木が残っていれば刷りますけれども、だんだんと木のほうが擦れてきて刷りが悪いです。そういうものの中から、庭園というものが理解することができます。

そういう流れですが、江馬館の庭園に関しては、応仁の乱が大きかったように思います。混乱期にあって造られたというのが、大きな特徴だと思います。

信長館もそうですが、庭を整備するにあたって、史跡に指定された後で発掘していくわけです。今は、庭園整備の中で発掘というのは非常に重要になってきています。醍醐寺三宝院というものがありますが、あそこは秀吉が亡くなった後にできあがったんですけども、そこで行っている整備でも復興庭園というものは、今までとはちよつと違って必ず護岸の発掘をするんですね。それによって、完全にとはいかないまでも元々の情報を得ることができ、そういう手順を踏むように変わってきました。私も色々な所に関わっていますが、まず必ず発掘をすることによって、その時代を特定しながら修復するわけです。

今、名古屋城の二之丸庭園が復元整備をやっているんですけども、発掘によっていろんなことが解ってきます。どういうことかということ、時代時代によって、庭に対する働きかけ(整備)がされているのが分かり、そのうちのどの要素をどう残していこうかと。必ずしも近代のものが悪くて、とっぱらって元にもどすのがいいのか、なかなか難しい問題です。皆さん色んなところに行かれたら、そういう目で見ていただきたいんですけども、大阪城でも同じような問題がでてきております。大

阪城も今保存整備を行っているんですけども、紀州御殿というのがあって、それは近代に造られた庭なんです。大阪城は徳川期のものですが、この庭をとっばらうのがいいのか、いややはりそんなことは出来ない、そんな問題が出てきております。そういうことを基本的に見つけていくのが、発掘かなと思います。今後、私は発掘の専門家と協力しながらやっていくことの必要性を日々感じている次第です。

#### 4. おわりに—江馬館庭園の整備—

江馬館の庭園の整備は、どういう考え方をしたかという、今言いましたとおり、「五ヶ石」の時代からずっと発掘しながら地道に事実を積み重ねていったというのがあります。

皆さんここでは奇異に思われるのは、まず樹木が無いということだと思います。最終的に整備するときに、木を植えるのをやめようと言ったんですね。ある庭園研究家から、庭木の無いような庭園はないと批判されたんですけども、いや、そうじゃないと。仮にここに松や色々な樹木を植えたとしても、それを手入れする人がいるのかということなんですね。京都は、あれだけの庭園文化が残っているのは、お寺さんがいっぱいあるからなんですね。お寺に出入りする植木職人がいたから、彼らがいなかったら植木の手入れの手法が残っていったんです。

また江馬は発掘していくと植木の根が無かったんですね。それと木を植えることによって、風景がものすごく変わってしまうんですね。今見ていただいている、いちばん重要な石組みの風景を見せることの方が、価値が高いただろうと。木を植えたり草木を植えるということは、着物を着せているようなものです。そうじゃない前の、本来の姿が出ているということで、そちらの方を優先したんですね。

樹木を植えた証拠があるから植えたけど、手入れができてないのと樹形が良くない事例がある。プロの植木屋さんの目から見たらちょっと酷いなと。そういうことになる可能性があるから、(江馬館では)植えるのをやめたという話をしました。今後の庭の見方についても、石組みをみてほしいわけです。今は、どこの名庭に行っても木が茂りすぎて石がみえていないということがあります。本来は、もっと石組みをしっかりと見せた方が良く思うのですが、ねじめ(石の脇に植えることでポイントをつける手法)のつつじ類とかが、大きくなりすぎて石が見えなくなるようなことも、よくよく見ていただければあると思います。

それと、船津花崗岩が使われているということは、地元の石を使っているということなんですね。それが基本なんですけれども、権力者は「献石」されて、例えば二条城や御所には色々な石があります。しかし基本は、地元の石を使うというのが風土を生かしたものだと思います。石を見ると色々なことが見えてきます。名古屋城の二之丸庭園を見ると、いろんな石が運ばれてきておりまして、それによって権力者の力関係がわかります。

もう一つ、皆さんがここで不思議に思われるのは、ここは池なのか池でないのかということ

ね。発掘した時に粘土層がなく、腐葉土といいます、池には水があると葉が落ちて腐って残るのに、ここには一切無かったんですね。

ここは雨が降った時、ちょっと溜まりますね。放っておくとまたずっと抜けるんですね。私たちも池というのは必ず水があるではないかと議論したことがあるんですが、どうもここはそうでは無いのではないかと。雨が降ったときには溜まるし、雨が無ければ無くなる。もう一つは、どうやらここは箕で水を持ってきたかもしれない。饗宴の場では水があったほうがいいから、そういうことがあったかもしれないですね。全国の発掘調査の事例からはそういった色々なバリエーションが出てきております。水を張るべきだという話も出たんですが、証拠がないのにそれは出来ないということでやめたんです。そういうこともここではありました。

おわりに、私が普段思っていることを話そうと思います。「地方の時代」「地方創生」と呼ばれて久しいですけども、今まで地方とは、工場誘致して労働の場を提供して落ちるお金をあてにしていたんですけども、それはあきらかに無理があると思います。行政も工場を誘致するために道路・上下水道・電気などのインフラを整えるんですね。そういうものを作って誘致したけれども、結局うまくいかなくなって撤退した時、残されるのは残骸だけなんですね。

アメリカだと、ウォルマート(Walmart)という大型スーパーがくるときには、出ていくときに元に戻すだけのお金を敷金としてとっているんですね。出て行く場合には元通りにしようということなんですね。そして、地元産品を入れるとか、特に農作物の半分以上は地元産のものを売ると決めているんですが、日本はそうでないですね。

なにが言いたいかというと、地方における文化財は地方を生き返らせるひとつのきっかけとなる。この庭は江馬氏でしかないわけです。歴史的なものですから、よその土地ではこの庭はありえないですね。そういう歴史的なものが地方のプライドになるのではないかと。文化財というものが今後活用されるということは非常に重要なことで、こういうものを次代の人達にどう残せるかと、活用計画を含め、今飛騨市もやっておりますし、他のところでも問題になっております。

文化財というものが、今後はもっとも日の当たる場になってくるのではないかと私自身、期待しております。飛騨市は山城のほうも色々されておまして、そういうものが飛騨市の財産であると、さらに進んで資産(それによって利益を生む可能性があるもの)だと思っております。

最後の方は雑談になりましたが、ひとまずこれで終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

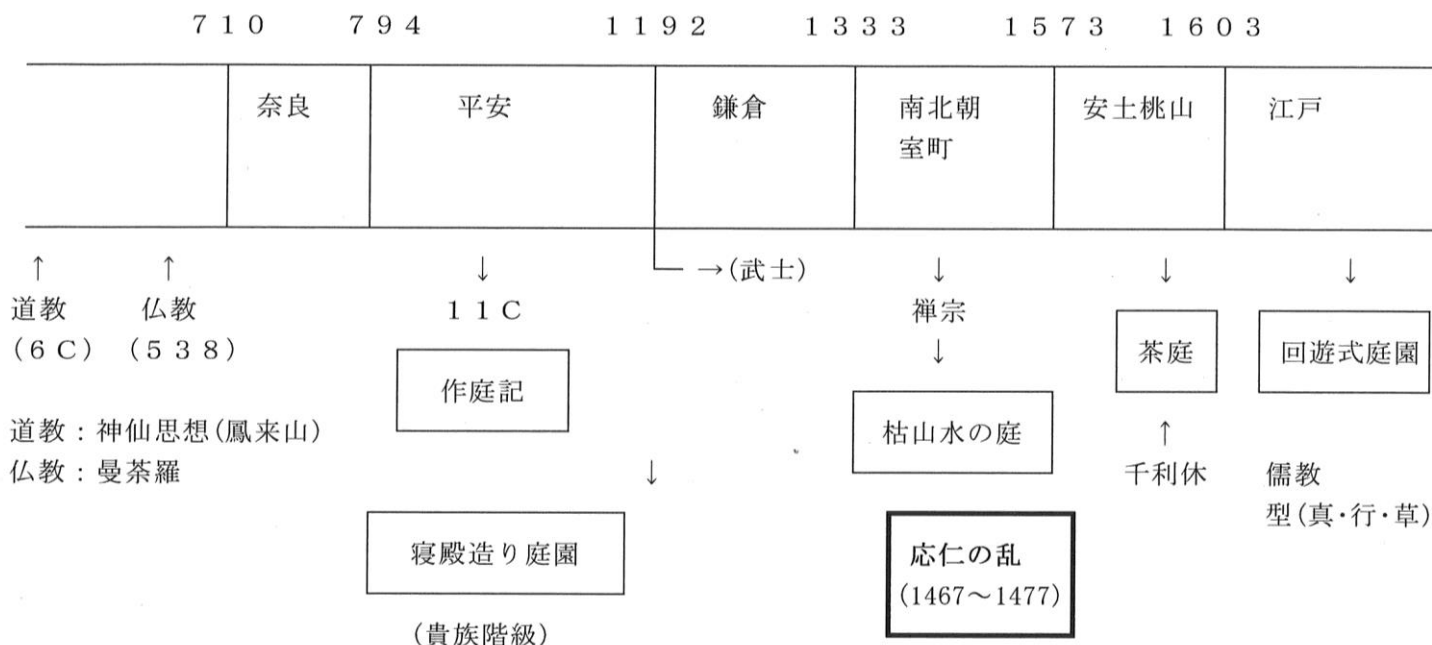
豪族江馬氏が残した庭－庭園文化の伝播－

20171021

名城大学 丸山 宏

○はじめに

○日本庭園史概説



○中世城館・居館の庭－守護大名豪族達の築庭・都への憧憬－

- ・梁川城跡（福島県針川町）：伊達氏 16C前半～中
  - ・八王子城跡（東京都八王子市）：北条氏 16C後半
  - ・松波城跡（石川県内浦町）：松波氏 15C後半
  - ・一乗谷朝倉氏遺跡（福井市福井市）：朝倉氏 16C
  - ・江馬氏館跡（岐阜県飛騨市）：江馬氏 15C末～16C初
  - ・東氏館跡（岐阜県郡上郡）：東氏 15C
  - ・岐阜城跡信長居館跡（岐阜市）：織田氏 16C
  - ・北畠氏館跡（三重県一志郡美杉村）：北畠氏 16C
  - ・観音寺城跡（滋賀県野洲郡中主町）：佐々木氏 16C
  - ・観音寺城跡（滋賀県安土町）：佐々木氏 16C
  - ・高屋城跡（大阪府羽曳野市）：畠山氏 15C
  - ・池田城跡（大阪府池田市）：池田氏 15C後半
  - ・大内氏館跡（山口県山口市）：大内氏 15C前半～16世紀中頃
  - ・湯築城跡（愛媛県高松市）：河野氏 16C
  - ・名護屋城跡（佐賀県鎮西町）：豊臣・徳川・木下・前田・堀氏 16C
  - ・隈部館跡（熊本県菊鹿町）：隈部氏 16C
- 等々

○おわりに －江馬館庭園の整備－